

「新しい心理学」と音楽の科学

——フランス近代音楽学形成期の実験的音楽研究再考——

山上揚平

フランスに於ける音楽観の近代化に深く関わる *la musicologie*(仏近代音楽学)の成立は、19世紀の実証主義、科学主義の隆盛の中で準備された。特にその様な思潮の象徴的帰結の一つである「新しい心理学」の誕生は、同時期の新しい「音楽の学問」を求める運動に対して大きな刺激になっていたと考えられる。本論の目的は、その中でも特に当時の「生理学的心理学」の分野でなされていた音楽研究を取り上げ、その成果が音楽観の近代化、あるいは様々な音楽認識の変化に与えた影響を考察するものである。

本論ではフランスにおける実験研究の具体例として、ボルドー大学医学部に提出された M.-P.ギボアの博士論文から循環器系の計測実験、フランス実験心理学の父 A.ビネが作曲家 M.ルノー=モーリーの協力の下に行った呼吸器系の測定実験、かつてのビネの共同研究者、Ch.フェレが、作曲家兼ピアニストの M.ジャエルと共に行った仕事量の測定実験などを取り上げる。これらは全て音楽聴取に伴う身体的反応を詳細に観察することで、音楽的感情に固有の性質を明らかにしようとするものだった。が、それらから明らかになったのは、生理学的観点からは音楽的感情に固有の反応は存在しないというものだった。

しかしながら本論は、これらの生理心理学研究に、音楽の認識論の観点から意義を見出し、*musicologie*の歴史の中に正当な位置づけを与えることを試みる。

最後に、本論は音楽を巡る言説に関して、様々な「心理学的」分野が相互に影響を与え合っていた当時の状況を描き出し、「音楽の学問」の近代化という問題に対しては、より幅広い視野での資料調査が不可欠であるだろうことを指摘する。